

お蔵論(壹)

蔵ってなんだろう?

湖北のまろには土蔵が多い。大きさや色、形には迷うところがあるのだろう。蔵は何のためのもの? どんな疑問をもへな流あ蔵論で解明しよう。

悪いことすると蔵に入れますよ

「蔵は長者の花」とは西鶴のことばである。庶民には、なかなか蔵は建てられない。土蔵造りは、大工と左官に払う費用が半々といわれるほど、高くなつからだ。仮に蔵を建ても、庶民には入れる道具がない。

「悪いことをすると、蔵に入れますよ」というのは、おぼつかないやまのお家の台詞。庶民の子どもが悪いことをして入れられるのは、せいぜい納屋か押入だ。「蔵が建つ」ことは、まさにステイタス・シンボルだったのだ。

湖北には蔵が多い。二、三軒に一軒は蔵があるかと思われる街道筋や集落も見られる。戦後電化製品が普及し出したころのよう、一種の家の競い合いもあつたのだろう。しかし、蔵を競つて建

てたいちゃんの要因は、火災への備えであったようだ。

昔は、火消しといえば燃える家を打ち壊すことだった。燃えるに任せたと言つてもいい。街道筋には、木造家屋が密集していた。集落の民家の屋根は、藁葺きだった。街も田舎も、家に火が付いたらもうおしまいだ。だから、蔵は、大きな耐火金庫のような役目を果たしたわけである。もちろん、盗難への備えもあつた。

土倉が造られはじめたのは鎌倉時代

日本で土倉が造られはじめたのは鎌倉時代のことだが、やはり、火事と盗難への備えが要因だったという。律令制が莊園制に移ると、京都では、在京国司である受領が国元でせつせと農民から収奪して、お宝を貯めこんだ。これに怒った庶民たちは、報復として盗難と放火を繰り返した。そこで、受領たちは、板倉を土倉に建て替えたのだという。

ところで、クラという字には、倉・庫・蔵があるが、これらにはそれぞれの由来があるのだ。たとえば倉は、校倉造りの正倉院というように、元来は国家的な穀物を收める場所を言う。庫は、兵庫や書庫のように文武の資産を收める場所のことだ。蔵は、収藏という文字に充てられるよう、収める内容ではなく行為を意味した。現在では、その違いはほとんどなくなつたが、米倉や商品倉などは食を使いたい。道具蔵や文庫蔵は、収蔵することに目的があつたから、蔵を使つ

てみたい。

酒蔵、醤油蔵、味噌蔵などは、収蔵するよりも、温湿度が一定である利点を醸造に応用した蔵である。なかで作業をするから、商家の道具蔵などに比べると、造りが粗雑だが、吹き抜けの大きな空間をもつている。

家紋入り蔵はステイタスシンボル

蔵が建てられる場所は、街道沿いでは、間口が広い家を除いて家の奥が一般的だ。主屋の奥には、坪庭と呼ばれる小さな前庭がある。前庭を挟んで蔵があり、蔵の入口へ飛び石が続いている。そんな配置が多い。

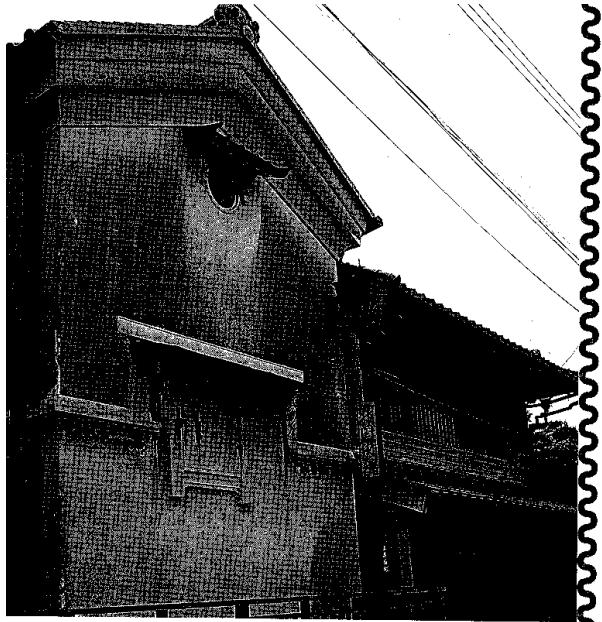
米川沿いには、大きな蔵が並んでいる。米倉や商品倉で、地ビールのお店「長浜浪漫ビール」に使われている蔵もそのひとつである。びわ湖の船運が盛んなころ、船で商品を運び、蔵へ收めるのに建てられた河岸蔵だ。

集落では、敷地の角に建てられる場合が多い。

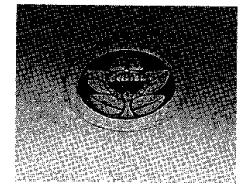
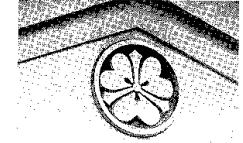
くる。これを防ぐために、四角い瓦を張りつけて漆喰で隙間を埋めているのが海鼠壁だ。白い漆喰が海鼠の形に似ていることから名づけられたものだ。

湖北には、倉敷にあるような海鼠壁の蔵は少ない。代わりに焼杉板を張つたり、下見板張りにしている蔵が多い。下まですべて白壁の場合、一階と二階の真ん中に、数センチほどの小さな庇を付けているものがある。雨が下へ流れ落ちるのを防ぐためである。

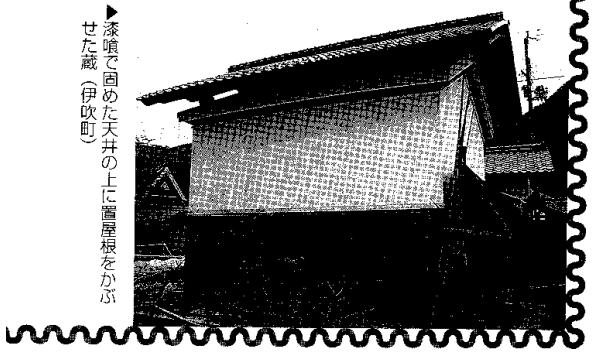
屋根の形はほとんど切妻だ。置き屋根形式の蔵は農村に多いが、これは塗り込めの屋根の上に木



▲壁面がみな漆喰で、上下の中央あたりに小さな庇を設けた蔵（長浜市）



▲妻の部分の家紋
(上・木ノ本町、下・浅井町)



▲(上) 煙のそばに建つ黄土色の蔵（伊吹町）
(下) 湖北には珍しいなまこ壁の蔵（余呉町）

▶漆喰で固めた天井の上に置き屋根をかぶせた蔵（伊吹町）

↑松居孝之祐商店の大きな蔵

昭和五十五年に発行された写真

集『長浜百年』に、明治の北国街道の町並みが載っている。南船町（現朝日町）にある松居孝之祐

商店の建物は、現在とほとんど変わっていないが、主屋の左手にある蔵の向きが違う。方向が九十度変わり、いまは切妻の面が街道に面している。

「さあ、なんでしような。奥の応接間といっしょに建て替えたんでしようかな」

まもなく七十歳になるという専務の松居善右衛門さんもわからぬと言った。履物の卸を商う松居孝

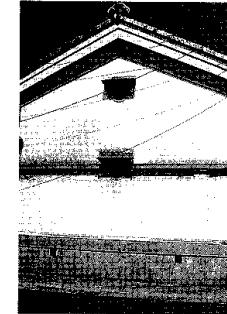
之祐商店は、昭和十六年ころにこの家を買った。もとは生糸商のものだった。生糸蔵は裏手に一棟ある。いまはその一棟が残っている。

街道に面した蔵は、文庫蔵と言われるもので、工芸品や道具類、家具などを収蔵したものだ。湖北の一般的な蔵の一倍はあるだろうか。とにかく大きい。

「長浜に三つしかないと言われた

そうです」

座敷から蔵を見ると、善右衛門さんの言葉がうなづける。間口は三間ほどある。中央に、一人では重くて閉められないほどの扉が観音開きになつていて。



蔵に入ると、ひんやりとした空気とほのかなケヤキの香りが漂っている。二階に上がり天井に明か

りを近づけてみると、地棟の墨書きに「明治四十三年十二月 宗廟建立」とある。『長浜百年』の写真是、明治四十年ころのものだから、その後すぐに建て替えられたものであることがわかる。

地棟の径は一メートル近くあるだろうか。それを支える桁の幅も一メートル近い。大きな民家でもこれほど太い構造材は使われていない。

地棟が支える天井は、筋金入りだ。幅数センチの鉄板が、等間隔にはめ込まれている。おそらく側壁にも筋金が入っているのだろう。等間隔にはめ込まれた割竹の間の砂すり壁が少し盛り上がりついて、このなかに筋金が入っているようだ。

再び外から蔵を眺めてみると、きちんと積まれた土台の切り石が見事だ。分厚い白壁に穿たれた一つの丸窓の装飾が職人の技と遊び心を感じさせる。

この蔵は、幾度かの地震にもびくともしなかった。火災や盗難から家の財産を守るという役割と、蔵の建築美を極めた蔵のなかの蔵だ。

（長浜市朝日町）

（右）觀音開きの重厚な扉
（下左）二階地棟の墨書き
（下右）壁には竹が等間隔にこじまれ

お蔵の扉をゴロゴロと開けていただきました。 文庫蔵、酒蔵は 長くしみ込んだ、それぞの匂いかします。 ぐつろぎの場や仕事場に変身した蔵には 新しい香りが混ざり合っています。

いずれにしても
蔵の中は別世界。
蔵主にとっての宝物入れ

取材・写真 ■室谷文雄・西山昇・葉舟蘭